

流行歌から見る歌詞の年代別変化

大出 彩
立命館大学文学部

松本 文子
神戸大学自然科学系先端融合研究環

金子 貴昭
立命館大学衣笠総合研究機構

本研究では、日本レコード大賞及び優秀作品賞を受賞した楽曲の歌詞について計量テキスト分析を行った。1978年から2012年に発表された全344曲の年代ごとに表れる歌詞の変化を読み取った結果、全年代を通してラブソングが流行する傾向にあると分かった。また、1990年代後半から2000年代にかけてネガティブな内容からポジティブな内容への変化が見られ、1997年が変化の境界になっていることが分かった。その要因には当時の社会背景が関係しており、失業率の増加や凶悪犯罪の増加などから人々の社会に対する不安が増大したこと、流行の発信者が若者へと移行していったことが影響していると考えられる。

Lyrics changes of popular songs analyzed by age

Aya Ohde
Faculty of Literature
Ritsumeikan University

Ayako Matsumoto
Organization of Advanced Science and Technology
Kobe University

Takaaki Kaneko
Kinugasa Research organization
Ritsumeikan University

This paper analyzed the lyrics of the songs which have received Japan Record Award or a merit award using the method of metrical content analysis. The 344 songs in total published from 1970's to 2010's showed changes of lyrics by ages. As a result, love songs have a tendency to become popular for all ages. Remarkable change was found from negative words to positive between 1990's and 2000's and the year of 1997 was the boundary line. The social background at that time is thought to be related with them. One factor was growing social unrest caused by rising unemployment rate and increasing vicious crimes. And another was that the young set the trend of songs in place of the adult.

1. はじめに

歌謡曲は、我々の日常から切り離すことのできないものである。「流行歌は(さまざまな制約や限界をもってはいるが)時代の民衆の心情のありかを知るための資料としては、最もすぐれた資料の一つであるといえよう。」(見田 2012) [1]とあるように、誰でも気軽に歌うことができる、簡単に広められるという点で、大衆の心情や不満を表現するものであるといえる。だからこそ、流行した歌謡曲の歌詞には、その時代が反映されているものであると考えた。したがって、流行歌の歌詞を、年代を追って分析することは、人々の心情を年代ごとに追うということに他ならない。もちろん、歌詞の内容だけが流行を決定する要因ではなく、歌い手やそのビジュアル・キャラクター、メロディなど、

その他の要素も流行に影響している。しかしここでは、比較的共通の理解を持って共感しやすい要素であると考えられる、歌詞のみを研究対象とした。

本研究の目的は、1978年から2012年の日本レコード大賞受賞作品の歌詞を用いて、年代ごとに表れる歌謡曲の傾向や変化を分析することである。これまでの歌謡曲における歌詞の研究では、平山(2009) [2] や金城(2013) [3]のように、ある特定の歌手の楽曲だけを対象としたものや、鈴木・山口(2000) [4]や細谷・鈴木(2010) [5]、小林・狩野・鈴木(2013) [6]のように、オリコンヒットチャートにランクインした楽曲が使用された研究等がある。オリコンヒットチャートはレコード・CD・音楽配信サービスなどの売上・リクエスト数による販売順位表であり、数量的な側面から流行した歌謡曲を選別しているのに対

し、日本レコード大賞¹は楽曲の質的側面（芸術性、独創性、企画性）から流行した歌謡曲を選別している。本研究では楽曲の質的側面に着目し、年代を追って日本レコード大賞作品の歌詞の表現にどのような変化があるのかを読み取っていく。

また、本研究の特徴は、長期間にわたる一定量のデータを研究対象としているところにある。それにより、時代の流れを汲み取った分析が可能となり、当時の社会背景を考慮しながら、歌詞との関係性を見出すことができるのである。これまでの歌謡曲における歌詞の研究においては、歌詞と社会背景を考慮した研究が少なく、一定量のデータを扱っていたとしても、歌詞のみの分析や、ある歌手の中での傾向や変化を分析する研究が多かった。そのため、本研究ではその時々々の社会背景が歌謡曲の流行に与えた影響についても言及する。

2. 研究対象・方法

取り扱う楽曲²は、第 20 回（1978 年）から第 54 回（2012 年）までの日本レコード大賞及び優秀作品賞受賞曲³の計 344 曲⁴である。

本研究では、計量テキスト分析を行うために、KHcoder⁵を使用した。KHcoder を選定した理由としては、恣意的な操作を避けてデータを計

¹ 日本作曲家協会が「作詞、作曲、編曲を通じて芸術性、独創性、企画性が顕著な作品とする。」「優れた歌唱によって活かされた作品で大衆の強い支持を得た上、その年度を強く反映、代表したと認められた作品に贈る。」という審査基準を設けており、その歌詞を分析することで、年代ごとの流行や変化を読み取ることができると判断した。

² 公益社団法人日本作曲家協会
(<http://www.jacompa.or.jp/index.shtml>) (参照 2013-10-23)

³ レコード大賞にノミネートされた作品群の総称である。「金賞」や「ゴールド・ディスク賞」という名称が使われていた時期もあったが、第 58 回（2008 年）から「優秀作品賞」に変更されている。

⁴ 第 19 回（1977 年）以前は優秀作品賞が設けられていないため、研究対象を第 20 回（1978 年）からとする。また、第 32 回（1990 年）及び第 35 回（1993 年）に関しても優秀作品賞が設けられていないが、大賞受賞曲のみを研究対象として分析する。

⁵ KH Coder 入手先 (<http://khc.sourceforge.net/>) (参照 2013-10-23)

表 1⁶ 歌詞に割り振ったコード

Table1 Codes labeled to lyrics

コード名	
恋愛	恋, 恋人, 初恋, 愛, 愛情, 恋愛, 愛しい, 愛す, 恋しい, 好き, love, lovers, boyfriend, girlfriend
別れ	別れ, 別れる, 別れ道, さようなら, さよなら, 別れ話, 別離
出会い	出会い, 出会う
人に関する表現(家族)	ママ, パパ, 兄貴, 兄弟, 兄妹, 兄さん, 弟, 妹, 孫, 母, お母ちゃん, お母さん, 母さん
人に関する表現(恋人)	恋人, lovers, boyfriend, girlfriend
人に関する表現(友達)	友達, 友人, friend
人称(日本語)	私, 僕, 俺, 貴女, 貴方, 君, お前
人称(英語)	アイ, you, we
一人称	私, 僕, 俺, アイ, we
二人称	貴女, 貴方, 君, お前, you
天気(晴れ)	晴れ, 晴れる, 晴れ渡る, 雨上がり
天気(雨)	雨, 時雨, 小雨, 氷雨, こめか雨, 雨雲
時間(過去)	昔, 過去, 昨日, 去年, yesterday
時間(現在)	今, now, 今日, 今年, 今夜, 今朝, 現在, tonight
時間(未来)	未来, 明日, 今宵, 今度, 明後日, future
ポジティブ	嬉しい, 楽しい, よろこび, 幸せ, 笑顔, 笑う, 微笑む, 信じる, ありがとう, 強い, 強さ, 勝つ, 勝利
ネガティブ	悲しい, 哀れ, 辛い, 苦しい, 不幸, 泣く, 泣かず, すずり泣く, 泣き声, 疑う, ごめんなさい, 諦める, 弱い, 弱さ, 悔しい, 裏切り, 負ける, 淋しい, さみしさ, 切ない

量的に分析することができ、さらにコーディングルールを作成することで、分析者が主体的かつ明示的にデータを分析することが可能だからである[7]。

歌詞のテキストデータは「うたまっぷ⁷」, 「歌ネット⁸」を参照し、作成した。全 344 曲を 1970 年代（1978 年～1979 年のみ）, 1980 年代, 1990 年代, 2000 年代, 2010 年代（2010 年～2012 年のみ）の 5 つの年代に分け、年代ごとの歌詞の変化や傾向を分析する。楽曲数は、1970 年代が 20 曲, 1980 年代が 105 曲, 1990 年代が 79 曲, 2000 年代が 110 曲, 2010 年代が 30 曲であった。

テキストデータには HTML マーキングを行い、H1 を各年代, H2 を各年, H3 をレコード大賞または優秀作品賞とした階層構造を作ることによって、検索単位や集計単位などを指定で

⁶ 異なる表記で同じ意味のものは（例「私」, 「わたし」, 「ワタシ」等）, ここではいずれか一つのみを記す。

⁷ うたまっぷ入手先 (<http://www.utamap.com/>) (参照 2013-10-23)

⁸ 歌ネット入手先 (<http://www.uta-net.com/>) (参照 2013-10-23)

きるようにした。

計量テキスト分析をする前に、分析対象とする全曲の歌詞を通覧した上で、歌詞の内容をより効率良く分析できるよう、コードを設定した。また、抽出語検索を利用し、検索結果を基にテキストデータに含まれる単語を用いてコードを作成した。コードに含まれる単語は確実に集計ができるよう、全て強制抽出の操作を行った。また、英語の一人称である「I」は「it」や「itself」等の「i」も集計されてしまっていたため、英語の一人称である「I」のみを確実に抽出するため、全てを「アイ」に変更し区別した。

分析に用いたコードは表1の17種類である。コードを選定した理由は、歌詞のテキストファイルを作成・通覧する過程において「ラブソングの割合が高いのではないか」、「年代を経るごとに英語の人称が増えるのではないか」という仮説に基づく。また、年代別の相違・傾向が明確に表れると考え、「ポジティブ」「ネガティブ」といった対称的なコードをいくつか作成した。

その結果、実際に恋愛に関する単語が歌詞に多く含まれていたこと、年代を経るごとに英語の人称が含まれる割合が増えることが明らかとなった。対になっているコードにおいても年代を追って一定の変化と傾向が見受けられた。この17種類のコードで集計を行った結果、表2のように関連する抽出語が多く出現したことから、本研究においてこの分類が妥当であったといえる。

3. 結果

表2は頻出の単語上位25語である。コードに当てはまる単語には右端に該当コードを記した。この表から分かるように、上位25語のうち最もよく出てくるコードは「恋愛」である。上位には人称を示す単語が多い傾向にあり、一人称よりも二人称がよく使われていると分かる。

表3はコードと年代のクロス集計をしたものである。合計の値を見てみると、コード「恋愛」は全体の約8割を占めているのに対し、コード「別れ」、「出会い」は2割に満たない。人に関する表現に関しては、僅差ではあるものの「人に関する表現(家族)」が最も多い割合を示して

表2 頻出25語

Table2 Top 25 frequently-appearing words

順位	抽出語	出現回数	該当コード
1位	あなた	507	人称(日本語)／二人称
2位	君	496	人称(日本語)／二人称
3位	愛	490	恋愛
4位	今	314	時間(現在)
5位	you	310	人称(英語)／二人称
6位	恋	290	恋愛
7位	夢	264	
8位	心	239	
9位	私	211	人称(日本語)／一人称
10位	アイ	205	人称(英語)／一人称
11位	僕	197	人称(日本語)／一人称
12位	夜	188	
13位	胸	175	
14位	人	170	
15位	涙	151	
16位	love	139	恋愛
17位	いつ	138	
18位	見る	138	
19位	空	128	
20位	女	125	
21位	風	123	
22位	生きる	113	
23位	言葉	109	
24位	好き	103	恋愛
25位	言う	102	

いる。人称に関しては圧倒的に日本語が多く、一人称であるか二人称であるかは、それほど大差がない。天気に関しては、コード「天気(雨)」の割合の方が高く、雨模様の方が歌詞にしやすいのではないかと推測することができる。時間に関しては、現在について歌われている割合が最も高い。コード「ポジティブ」と「ネガティブ」では、若干ではあるが「ネガティブ」が全体の割合を上回っている。

カイ二乗検定を行ったところ、コード「恋愛」、「人に関する表現(家族)」、「人に関する表現(恋人)」、「人称(英語)」、「時間(現在)」は5%水準、「出会い」、「時間(未来)」、「ポジティブ」が1%水準で有意差があった⁹。したがって、コード「人称(英語)」は1980年代から1990年代でやや減少しているものの、全体的にみて増加傾向にある。有意水準1%で差があるコード「出会い」、「時間(未来)」、「ポジティブ」に共通して言えるのは、「ポジティブ」が1970年代

⁹ カイ二乗値に「*」が二つ付いていれば1%水準の有意差あり、一つならば5%水準の有意差あり。

表3 コードと年代のクロス集計

Table3 Cross tabulation of codes and ages

	恋愛	別れ	出会い
1970年代	12 (60.00%)	5 (25.00%)	0 (0.00%)
1980年代	88 (83.81%)	22 (20.95%)	7 (6.67%)
1990年代	65 (82.28%)	13 (16.46%)	7 (8.86%)
2000年代	78 (70.91%)	12 (10.91%)	17 (15.45%)
2010年代	22 (73.33%)	4 (13.33%)	10 (33.33%)
合計	265 (77.03%)	56 (16.28%)	41 (11.92%)
カイ2乗値	9.798*	5.319	20.584**
	人に関する表現(家族)	人に関する表現(恋人)	人に関する表現(友達)
1970年代	0 (0.00%)	0 (0.00%)	1 (5.00%)
1980年代	1 (0.95%)	0 (0.00%)	2 (1.90%)
1990年代	8 (10.13%)	0 (0.00%)	4 (5.06%)
2000年代	6 (5.45%)	0 (0.00%)	1 (0.91%)
2010年代	3 (10.00%)	1 (3.33%)	0 (0.00%)
合計	18 (5.23%)	1 (0.29%)	8 (2.33%)
カイ2乗値	10.185*	10.497*	5.004
	人称(日本語)	人称(英語)	一人称
1970年代	16 (80.00%)	0 (0.00%)	15 (75.00%)
1980年代	91 (86.67%)	18 (17.14%)	63 (60.00%)
1990年代	65 (82.28%)	12 (15.19%)	48 (60.76%)
2000年代	90 (81.82%)	26 (23.64%)	73 (66.36%)
2010年代	28 (93.33%)	10 (33.33%)	26 (86.67%)
合計	290 (84.30%)	66 (19.19%)	225 (65.41%)
カイ2乗値	3.33	11.122*	8.961
	二人称	天気(晴れ)	天気(雨)
1970年代	11 (55.00%)	0 (0.00%)	1 (5.00%)
1980年代	82 (78.10%)	4 (3.81%)	17 (16.19%)
1990年代	60 (75.95%)	3 (3.80%)	13 (16.46%)
2000年代	85 (77.27%)	8 (7.27%)	20 (18.18%)
2010年代	27 (90.00%)	3 (10.00%)	6 (20.00%)
合計	265 (77.03%)	18 (5.23%)	57 (16.57%)
カイ2乗値	8.462	4.16	2.41
	時間(過去)	時間(現在)	時間(未来)
1970年代	3 (15.00%)	8 (40.00%)	1 (5.00%)
1980年代	14 (13.33%)	52 (49.52%)	16 (15.24%)
1990年代	5 (6.33%)	43 (54.43%)	19 (24.05%)
2000年代	18 (16.36%)	58 (52.73%)	45 (40.91%)
2010年代	7 (23.33%)	25 (83.33%)	16 (53.33%)
合計	47 (13.66%)	186 (54.07%)	97 (28.20%)
カイ2乗値	6.701	12.897*	32.837**
	ポジティブ	ネガティブ	ケース数
1970年代	9 (45.00%)	9 (45.00%)	20
1980年代	40 (38.10%)	61 (58.10%)	105
1990年代	50 (63.29%)	55 (69.62%)	79
2000年代	76 (69.09%)	65 (59.09%)	110
2010年代	23 (76.67%)	17 (56.67%)	30
合計	198 (57.56%)	207 (60.17%)	344
カイ2乗値	29.109**	5.26	

から 1980 年代で一度減少してはいるものの、全体的に見てどれも増加しているということである。ポジティブが 1970 年代から 1980 年代にかけて大きく減少し、その後 1990 年代にかけてさらに大きく増加していることから、この年代に何か大きな変化が生じた可能性を指摘することができるだろう。

図 1 は対になっているコードのみを選択し、年代を集計単位として対応分析をしたものであ

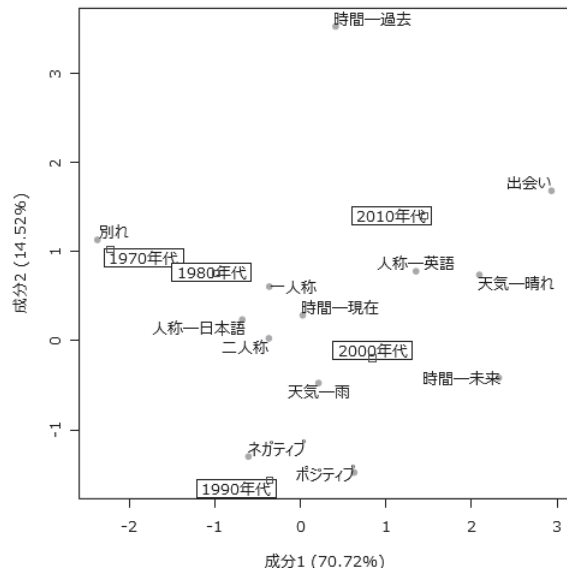


図 1 対応分析

Figure1 Correspondence analysis

る。成分 1 は時系列と解釈できる (値が大きくなるほど年代が進む)。成分 2 に関してはコード [時間] について見てみると上から [時間 (過去)] [時間 (現在)] [時間 (未来)] になっていると解釈できる。特徴的なのは成分 1 の軸であり、年代を経るごとにコードが [別れ] から [出会い], [ネガティブ] から [ポジティブ], [天気 (雨)] から [天気 (晴れ)], [人称 (日本語)] から [人称 (英語)] に移り変わる傾向があると分かる。最も対応が顕著に表れているのは、[別れ] と [出会い] である。これらの対になっているコードは、どれも 1990 年代後半から 2000 年代近くが境界となっている。成分 1 を基準に見てみると、[一人称] と [二人称] では大きな差は無いので、年代による差が無いと分かる。

ここで上に挙げた対になっているコードを取りだし、それぞれをグラフにしたものが図 2 から図 4 である。横軸は年、縦軸は各コードを含む曲の割合 (パーセント) である。図 2 はコード [別れ] と [出会い] のみを取りだしたグラフである。

図 2 では、1989 年に一度 [出会い] が [別れ] を上回っているものの、前半部分 (1978 年から 1996 年) は圧倒的に [別れ] が [出会い] を上回っている。一方、後半部分 (1997 年から 2012 年) では [出会い] が上回る年が

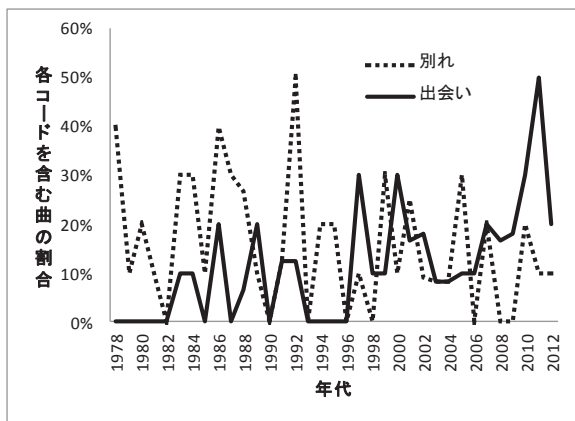


図 2 各年におけるコード [別れ], [出会い] を含む曲の割合

Figure 2 Proportion of songs containing the codes of "Breakup" or "Meeting"

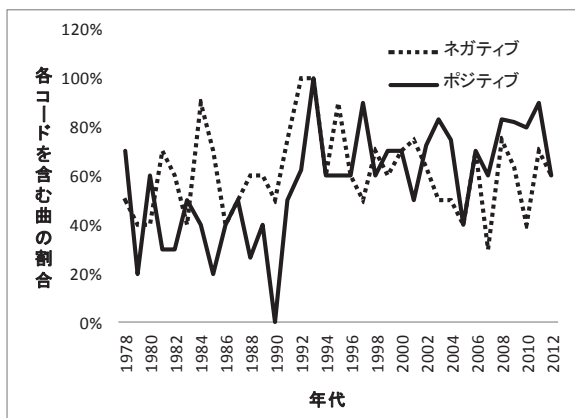


図 3 各年におけるコード [ネガティブ], [ポジティブ] を含む曲の割合

Figure 3 Proportion of songs containing the codes of "Negative" or "Positive"

多い。図 3 も同様にコード [ネガティブ] と [ポジティブ] を取りだしたグラフであるが、こちらも前半部分 (1978 年から 1996 年) は [ネガティブ] が上回っている年が多いのに対し、後半部分 (1997 年から 2012 年) は [ポジティブ] が上回っている年が多い。これら二つの図を見ると、どちらも前半部分は [別れ] や [ネガティブ] が上回っている年が圧倒的に多いのに対し、後半部分は [出会い] や [ポジティブ] が上回る傾向にあるものの、[別れ] や [ネガティブ] が上回る年も少なくない。

図 4 はコード [天気 (雨)] と [天気 (晴れ)] を取りだしたものである。こちらは全年代を通

して [天気 (雨)] が上回る傾向にあり、図 2 や図 3 のような流行の変化は見られなかったが、1997 年だけは [天気 (晴れ)] が [天気 (雨)] を上回っていると分かる。

図 5 はコードと年をクロス集計した値を、前半 (1978-1996) と後半 (1997-2012) で分けてそれぞれの平均割合を出したものである。[ネガティブ], [天気 (雨)], [別れ] など暗い内容のコードは全て、後半になると減少しており、[ポジティブ], [天気 (晴れ)], [出会い] など明るい内容のコードは後半になると増加していると分かる。

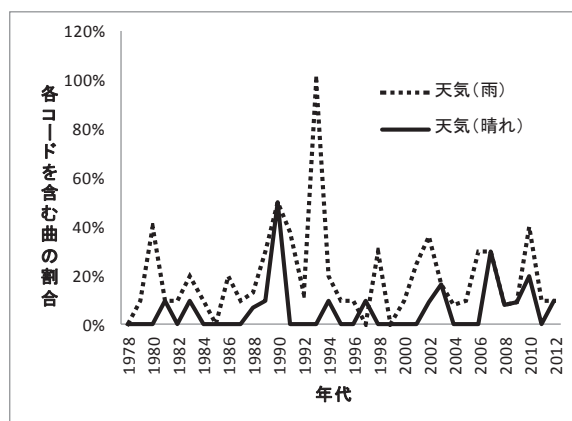


図 4 各年におけるコード [天気 (雨)], [天気 (晴れ)] を含む曲の割合

Figure 4 Proportion of songs containing the codes of "Weather-Raining" or "Weather-Fine day"

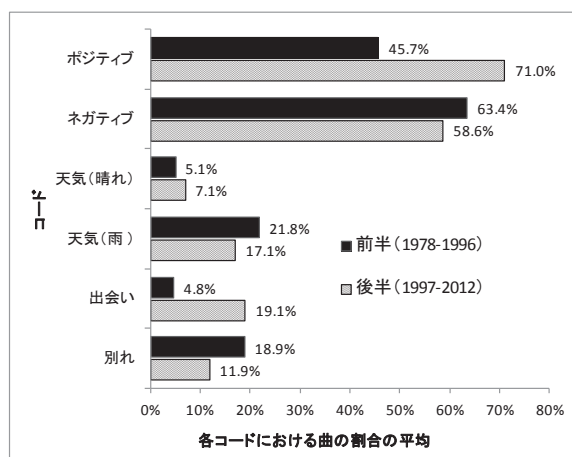


図 5 前半 (1978-1996) と後半 (1997-2012) の各コードを含む曲の割合の平均

Figure 5 Proportion of songs containing the codes of "Before 1997" or "After 1997"

4. 考察

表 2 より、頻出 25 語のうちコード [恋愛] に関する単語が最も多いことが明らかになった。また、表 3 より、コード [恋愛] が全体の約 8 割を占めていることから、年代を問わずラブソングが流行する傾向にあると指摘できる。恋愛とは老若男女を問わず誰もが経験するものであり、歌を聴く人の共感を最も得やすいテーマだからではないかと考えられる。

図 1 からは、年代を追うごとに明るい内容の楽曲が評価されるようになったことが明らかになる。特に、1990 年から 2000 年の間が境界線となっており、図 2 や図 3 を見てみると、1997 年頃が境目になっていると判断することができる。そこで、1997 年を境界であると仮定してコードに投入した結果が図 5 である。

図 5 では、1997 年を境界に 1978 年から 2012 年を前半と後半の二つに分けた場合、コード [別れ]、[ネガティブ]、[天気 (雨)] など暗い内容の楽曲は減少し、コード [出会い]、[ポジティブ]、[天気 (晴れ)] など明るい内容の楽曲が増加している。このことから、年代を追うごとに明るい内容の楽曲が評価されるようになったことが明らかになる。図 4 では、全年代を通してコード [天気 (雨)] が [天気 (晴れ)] を上回る傾向にあると指摘したが、図 5 を見ると、1997 年を境に [天気 (雨)] は減少、[天気 (晴れ)] は増加しているので、[天気] に関しても同様に明るい内容が評価されるようになったといえる。

これらを、当時の社会背景と照らし合わせながら考察する。1997 年前後の経済的背景や音楽業界の情勢から、歌詞の変化にどのような影響を与えているのかを考える。

i. 経済的背景

失業率の増加

バブルの崩壊と同時に、それまで 1 パーセント前後だった失業率が跳ね上がった。年平均失業率は 1997 年には 3.4 パーセント、1998 年には 4.1 パーセント、1999 年には 4.7 パーセントと急激に上昇している。

共働き世帯の増加[8]

1997 年以降、共働き世帯が専業主婦世帯を上回り、増加を続けている。

地域とのつながり低下

共働き世帯の増加とともに単身世帯も増加し、地域のつながりが低下していった。

少子高齢化

1994 年には 65 歳以上比率が 14% を超え、高齢化社会となった。さらに、1997 年には老年人口が年少人口を上回り少子高齢化社会となった。

増税

1996 年から始まった橋本内閣の金融政策によって、1997 年には消費税が 3 パーセントから 5 パーセントになった。また、健康保険の自己負担率も引き上げられるなど、国民の負担が大きくなった年であった。

このような経済的背景から、人々の悩みや将来への不安が増大している[9]。日本漢字能力検定協会が毎年発表している「今年の漢字」があるが、1997 年には「倒」が 1 位となった。1997 年は大型企業の倒産や金融機関の破綻などが相次ぎ、倒産件数は前年度を大きく上回り、負債総額は戦後最悪の年であった[10]。そのため、人々の社会への不安が増大した年であったといえる。

さらに、1995 年には阪神・淡路大震災や地下鉄サリン事件、1996 年には O157 による集団食中毒、1997 年には神戸連続児童殺傷事件など世間を震撼させる事件が相次いだ。こういった社会背景が大衆の不安をより一層煽り、価値観の変化に影響を与えたと考えられる。これらの社会不安の増大から、図 2 や図 3 の後半部分の流行の多様さが表れているのではないかと考えられる。

ii. 音楽業界の情勢

音楽 CD の売上ピーク

1998 年には日本国内での音楽 CD (8cm と 12cm) の生産金額及び生産枚数がピークを迎えた¹⁰。

情報通信関連機器の普及

¹⁰ 一般財団法人日本レコード協会
(<http://www.riaj.or.jp/>) (参照 2013-10-23)

パソコンや携帯電話, PHS が一般家庭にも普及し, 1997 年には携帯電話の保有率が世帯で大幅にアップした[11]. また, 1996 年には音楽配信サービスが始まり, 1998 年には着信メロディ配信サービスが実用化された[12]. その後, 2000 年代には着うたや着うたフルといった音楽配信サービスが普及し, 誰でも手軽に音楽を楽しむことができるようになった.

10 代の歌手の活躍

1996 年には安室奈美恵が史上最年少(当時 19 歳)でレコード大賞を受賞. 翌年も安室奈美恵が大賞を受賞した. 以降, 宇多田ヒカルや SPEED, モーニング娘。といった 10 代の歌手がレコード大賞にノミネートされるようになるなど, 若い世代(特に 10 代)の活躍が目立つようになる¹¹.

CD の売上枚数がピークを迎えたことは, より多くの人が音楽に興味関心を抱き, 慣れ親しむようになったことを示しているといえるだろう. また, 歌を提供する側で若い世代が台頭してくることによって, 若者が楽曲を評価する中心になってきていると考えられる. さらに, 1996 年の流行語大賞¹² トップテンには「ルーズソックス」, 「チョベリバ/チョベリグ」, 「アムラー」など, 当時の女子中高生が使用する言葉がランクインしており, 流行の主役が若者へと代わっていったといえる.

音楽業界についていえば, 流行の主役が若者に移る傾向は, 2000 年代に情報通信機器が普及・発達するとともに, 音楽配信サービスが充実したことにより, 確固たるものになった. つまり, 若者たちがより手軽に楽曲を購入するようになり[13], 情報通信機器を携帯することによって, 様々な場所で音楽を楽しむことができるようになったのである.

このような流れの中で, 若者たちは, ネガティブで現実的なものよりも, 明るい未来を見据えるような希望を歌に見出していたのではない

だろうか. 1990 年代後半を境に, 明るくポジティブな内容の楽曲が評価されるようになったのは, こうした若者たちによる希望的な考え方が影響していると考えられる.

図 1 の横軸を見てみると, 人称が日本語から英語に推移していることが分かる. これより, 年代を経るにつれて, 英語に対する人々の抵抗が無くなりより身近な言語になっているといえる. 1991 年にバブルが崩壊した後, 日本経済のグローバル化が顕著になった[14]ことが影響し, レコード大賞曲の歌詞にも英語が浸透していったと推察できる.

5. おわりに

本研究は, 1978 年から 2012 年のレコード大賞及び優秀作品賞を受賞した楽曲の歌詞を, 計量テキスト分析という方法を用いて分析し, 歌詞の内容に年代別に変化が見られることを明らかにした. 分析を通して, 年代を問わずラブソングが流行する傾向にあることが分かった. また, 年代を経るごとに, ネガティブな内容の歌詞からポジティブで明るい内容の歌詞が評価される傾向にあることが分かり, その変化は 1997 年頃を境に始まっていることも明らかになった. さらに, 年代を経るごとに, 人称が日本語から英語に推移していることも判明した.

これらの変化の要因として, 当時の経済的背景や社会背景, 音楽業界の情勢が影響していると考察を行った. 大企業の倒産や凶悪犯罪などから社会不安が増大したこと, 流行を発信する世代が低年齢層に移行したことなどが, 大衆の価値観の変化や多様化を促し, 評価される楽曲の歌詞の変化に反映されていると考えられるが, 今後より詳細な分析によって検証する必要があるだろう.

今回はレコード大賞及び優秀作品賞を受賞した作品のみを研究対象としたが, 今後はより多くの歌謡曲を分析した上で, 結果の妥当性を高めたい. またメロディとの関連も重要であることから, テキスト分析とメロディを関係づける研究方法についても考究したいと考えている.

¹¹ 公益社団法人日本作曲家協会
(<http://jacompa.or.jp/index.shtml>) (参照 2013-10-23)

¹² ユーキャン新語・流行語大賞
(<http://singo.jiyu.co.jp/>) (参照 2013-10-23)

参考文献

- [1] 見田宗介：定本見田宗介著作集IV近代日本の心情の歴史，pp.10, 岩波書店，東京(2012).
- [2] 平山千晴：ゆずの歌詞分析，帝京日本文化論集，Vol.16, pp.290-276 (2009).
- [3] 金城克也：榎原敬之の歌詞の数量的分析：『君が笑うとき君の胸が痛まないように』から『Heart to Heart』まで，琉球大学欧米文化論集，Vol. 57, pp.23-42 (2013).
- [4] 鈴木直枝，山口孝志：流行歌の歌詞にみる言語の変遷：過去34年間のヒット曲を通して，東北生活文化大学三島学園女子短期大学紀要，Vol. 31, pp.55-65 (2000).
- [5] 細谷舞，鈴木崇史：女性シンガーソングライターの歌詞の探索的分析，じんもんこん2010：人文科学とコンピュータシンポジウム論文集，pp.195-202 (2010).
- [6] 小林佳織，狩野恵里奈，鈴木崇史：女性グループの歌詞の計量テキスト分析，言語処理学会第19回年次大会発表論文集，pp.338-341, (2013).
- [7] 樋口耕一：テキスト型データの計量的分析：2つのアプローチの峻別と統合，理論と方法，Vol.19, No.1, pp.101-115 (2004).
- [8] 厚生労働省：図表1-1-7 専業主婦世帯と共働き世帯の推移，厚生労働省（オンライン），入手先
(<http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/11/backdata/data/1/23010107.xls>) (参照 2013-10-23).
- [9] 厚生労働省：平成23年版厚生労働白書概要版，厚生労働省（オンライン），入手先
(<http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/11-1/dl/gaiyou.pdf>) (参照 2013-10-23).
- [10] 帝国データバンク：全国企業倒産集計1997年度年報，帝国データバンク（オンライン），入手先
(<http://www.tdb.co.jp/report/tosan/syukei/97nendo.html>) (参照 2013-10-23)
- [11] 総務省：第8回（平成9年度）通信利用動向調査，総務省（オンライン），入手先
(http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/pdf/HR199700_001.pdf) (参照 2013-10-23)
- [12] 一般社団法人日本レコード協会：70周年記念誌，一般社団法人日本レコード協会（オンライン），入手先
(http://www.riaj.or.jp/issue/anniversary/70th/pdf/70th_4.pdf) (参照 2013-10-23)
- [13] 一般社団法人日本レコード協会：2006年度「音楽メディアユーザー実態調査」，一般社団法人日本レコード協会（オンライン），入手先
(<http://www.riaj.or.jp/release/2007/pr070404.html>) (参照 2013-10-23)
- [14] 内閣府：平成16年度年次経済財政報告，内閣府（オンライン），入手先
(<http://www5.cao.go.jp/j-j/wp/wp-je04/04-00000.html>) (参照 2013-10-23)
- [15] 井口太：幼児歌唱教材の分析：歌詞の特徴の数量化による分析の試み，東京学芸大学紀要第1部門教育科学，Vol.44, pp.53-58(1993).
- [16] 石原真三子：失業率の上昇と非正規労働の拡大についての分析，城西大学経済経営紀要，Vol.25, pp.1-16 (2007).
- [17] 越智康詞，金子真由子：現代社会に広がる「こころ」の文法：1990年代ヒット曲の歌詞分析を通して，信州大学教育学部紀要，Vol.105, pp.145-156 (2002).
- [18] 仁田道夫：1997-98年金融危機以後の雇用調整，社会科学研究，Vol.54, No.6, pp.61-70 (2003).
- [19] 樋口耕一：内容分析から計量テキスト分析へ：継承と発展を目指して，大阪大学大学院人間科学研究科紀要，Vol. 32, pp.1-27 (2006).